



Title	農村信仰の諸問題 : ソローキン及び其學派の所説に就いて
Author(s)	池田, 善良
Description	資料
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 5, 94-122
Issue Date	1937-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10644">https://hdl.handle.net/2115/10644</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p94-122.pdf



資料

農村信仰の諸問題

——ソローキン及び其學派の所説に就いて——

池田善長(譯)

目次

A. 序

言

農村の宗教組織

第一節 前都市化時代

第一項 宗教機關としての家族

第二項 宗教機關としての部落共同體

第三項 特殊宗教機關

第四項 教儀及び儀禮に及ぼす慣行の

影響

第五項 禮 拜 所(聖域)

第六項 宗教と世俗との緊密なる關係

第二節 都市化の影響

B. 農村の宗教的信仰

第一節 崇敬神及び對象

第二節 儀 禮

第三節 農業上の象徴主義及び幻想

第四節 農村宗教の非物質的性質

第五節 其の他の農村と都市とに於ける

宗教的相違點

第一項 在來的及外來的宗教

第二項 信仰の分布及び變化

第三項 信仰の強弱

第四項 宥恕・非宥恕の比較研究

參 考 文 獻

## 序 言

此處に紹介せんとするものは農村社會學現時の主流を形成する所謂比較農村社會學派の耆宿ソーキン教授及び其一派の農村信仰問題に關する見解の大様である。ソーキンの社會學界に於ける地位並にその功績は今更喋々する迄もあるまい。唯本問題に關する限り彼の學說の特長に就て一言しておき度い。

彼は先づ一般社會を都市社會と農村社會に分類する事に出發し其相互的比較を試み、斯くして農村社會特有の普遍的要素を抽出發見せんと企てんとするもので要之、常に農村に於ける社會現象を都市化 Urbanization の過程に於て把握せんとする立場之である。

即ち同教授は農村社會學に於て如何なる問題に對しても此立場を終始一貫して嚴守される。従つて農村信仰に關しても此見地に於て論ぜられる點を前提的に理解されねばならぬ。

扱て、以下紹介せんとする所論は主として同教授並に他の共同研究者によつて成れる次の二著中の農村宗教に關する部分に據つたことを記しておく。

P. A. Sorokin, C. C. Zimmerman:—Principles of Rural-Urban Sociology, 1929.

P. A. Sorokin, C. C. Zimmerman, C. J. Galpin:—A Systematic Source Book in Rural Sociology, Vol. 2, Chap. XIV, 1932.

(附記) 本文は私の文部省精神科學研究援助による「本邦農村に於ける固有の信仰に關する研究」に資するために、池田學士の手を煩はして大意を反譯紹介したものである。(小林)

### A 農村の宗教組織

#### 第一節 前都市化時代 (Pre-Urban Stage)

農民が未だ充分に都市化されぬ以前は、彼等の宗教組織は過去に於ける遊牧時代からの傳統が幾分交れる若干

の重要な特徴を帯びて居る。即ち(一)家族は最も重要な宗教擔當者の一つであり宗教上の儀式、僧侶の仕事は其家族殊に家長によつて行はれ、(二)各家族は相互に協力し家族外の宗教上の儀式や事務執行の役割を演じ、(三)物知り *Wiseman* であり魔法使 *sofocren* であるところの僧侶は唯一の家族に非ざる宗教機關であるが、むしろ純粹の宗教的問題よりも汎く世俗的に携つて居た。(四)諸慣習が信仰・祭禮等の調整に指導的役割を演じ、(五)家族の住居内には宗教上の目的のために特別の場所が設けられ、村落でも宗教上の行事に専用の建物も設けられてあつた。寺院は概ね村落の集會・裁判・娯樂其他の中心でもあつた。(六)宗教的機能と教育的・法律的・政治的・家庭的諸機能との間には截然たる區別なく、諸種の技藝・娯樂等は宗教的儀式と緊密に結びつけられ、教育も性質上宗教的であり、又宗教は法律・政治と密接不可分の關係にあつた。次に其主なる問題を解説しよう。

第一項 宗教機關 *Religious agency* としての家族 農村が充分に都市化されない時代に於ては家族は主要なる宗教的機能を果たし、信仰・祈禱其他の儀禮は生涯を通じて其家族が繼續的に接觸して居る日常の家庭生活に依つて傳へられて行つた。斯くて家族は一種の宗教機關として考へられ、神聖なる場所は家族の神によつて教養祭禮・儀式の中に占められた。(祖先の祭祀、ギリシヤ・ローマの家の神、支那ヒンズー教のかまど、井戸・玄關・客間の神、スラブ族・チュートン族の家の神)祈禱・祈願は毎日其家族の幸福のため家庭内に行はれた。

各家族の住居には特別な場所があつて之等の儀式や祈禱のための神聖な場所と考へられて居つた。又屢々親しい家族間にはお互の寺院を持つて居つた。現在でも支那人・ヒンズー教徒・ロシア人及び歐洲人の農家には斯かる特別な部屋乃至場所があつて其處には宗教的な繪畫・彫刻其他家族の宗教上の儀式のため捧げた護身符等がある。然るに多くの都市の住宅には此種のを殆んど見る事は出来ぬ。如斯く、家族は當時主要なる宗教擔當者であり、夫れは儀式のため謂はゞ家族教會 *Family church* ともいふ如き儀式場を持つて居た。そして夫れは宗教儀式の多くの事柄を處理した。宗教の本體とも稱すべきものは家族自身に體現された神や力や現象であつた。

かくて家族的宗教機關の教主制のためにあらゆる宗教儀式を遂行する包括的な権限を持つた職業的僧侶と其遂行のため捧げる教會か建物かを必要とする事が少なかつた。此事は農業社會の家族的宗教機關の組織の簡單を説明するに充分である。

第二項 宗教機關としての部落共同態 家族のインタレスト以外に尙ほ一定の共同社會に屬する農民は或共同のインタレストを持つて居る。そして之は共同社會の全體としての行動によつて助長され保護された。此場合種々な宗教上の祈禱・祭禮は斯様な共同社會全體のインタレストの助長と保護の手段として考へられたので共同態が宗教機關として働き各種の宗教上の祭禮等が共同で行はれた事は當然である。

之等の祭禮が長年月の間變化せず殘存したので彼等には特に僧侶とか特殊の宗教機關を必要としなかつた。

第三項 特殊宗教機關 特殊な必要乃至機能のため共同社會には醫師・智者・占易者或は僧侶といふ如きものがあつた。彼の職業が何であらうともかゝる機關の機能は家族や共同態の構成員によつて遂行された事を補つて居た。假令彼が特殊の智識乃至技能によつて名聲を得た農業者の一人であらうとも、或は僧職の教育を受けた僧侶であらうが彼は常に家族の宗教上の仕事を司り、世俗上の事のみならず精神的な方面に就ても助言をなし、或は宗教的乃至魔術的な易斷 *Magical divinators* をなし疾病における醫師としての役目をなしたり、時には共同社會のメンバー間の紛争の判定者として又は説教者としての役目を果したりした。

第四項 教儀及び儀禮に及ぼす慣行の影響 家族や如上の特殊な宗教機關が其宗教上の仕事や祭禮を行ふに一般に宗教權威者の規制によるよりむしろ共同社會の慣習・様式といふものに規制せられた。即ち共同社會の傳統主義は各種の獨斷的な教義や宗教權威者の教理によつてではなく共同態の諸種の慣習によつて祭禮・信仰等における急速なる變化を妨げた。

第五項 禮拜所（聖域） 一般公衆の宗教的祭禮を行ふため特殊の共同の場所があつた。斯かる禮拜所は小

さな森・岩・小川或は山の中乃至は寺院教會の如き特殊建築物に設けられた。之等は極めて宗教上の目的に叶ふ様にかざられた。之は宗教上に用ひられるのみならず場合によつては、若し夫れが建物である場合には部落内の問題を討議するため部落民の集合所として或は裁判所として又は公示場としても使用された。斯かる目的のため禮拜所を使用する事は此時代に於ては世俗の問題、例へば婚姻・死亡・出生・收穫・耕耘・收穫祭・犯罪・戰爭乃至は體育上・美術上の競技等に至る迄も宗教から離れて居らず殆んど總ての共同社會の出來事は皆宗教的見地をもつて居たといふ事から容易に理解出来る。此事は又、何故農民が彼等の寺院を彼等の誇りの權化、彼等の歴史、彼等の共同態夫れ自身として美しくかざつた處の美術館 Art museum と考へたかによつても説明される。農村の祭禮を行ふ傍ら農民は屢、その生家から遠くはなれた聖域に行くことがあつた。

第六項 宗教と世俗 *Secular activities* との緊密な關係 此時代は宗教と日常生活、宗教機關と農業者、宗教組織と家族及び共同社會組織は殆んど本質的には差異あるものではなく、此意味に於て前都市化農村社會 *Pre-urban agricultural society* は遊牧社會 *Nomadic groups* と同様であつた。飲食・耕耘・播種・收穫といふ如き日常の常規は宗教上の諸様式即ち神酒や神への祈り等に於て行はれた。斯く日常生活と宗教生活の密接な關係は都市生活とよいコントラストをなして居る。即ち都市生活に於ては仕事と宗教は全く分離せられるに對し斯かる古い農業社會に於ては宗教生活と日常生活は不可分離である。此早い時代の農業社會における日常生活からの宗教の分離といふことは彼等の住居の一部分が寺院又は祈禱の場所として捧げられてあるに對し都市に於ては斯かる特長を見出せないといふ事實からも説明し得よう。我々にとつて住宅は寺院ではなく又教會は住宅ではない。尙上述の如く主要なる宗教儀式は僧侶の代りに家族によつて代行され、従つて農民は後の都市化時代に於けるより、より廣汎に宗教上の機能に參與した。併し其後の都市化の過程によつて宗教機關としての農民は特別な状態乃至時間に於て之を専門的に行ふ宗教家によつて排除され始めた。宗教と日常生活、宗教擔當者と農民、家

建物、族と僧侶、住宅と教會との關係はかくして分離せられた。その結果宗教はその活動力を大いに失ひ、日常生活はその宗教性乃至道德性を失つた。

次の諸事實は未だ充分に都市化されぬ以前の農村に於ける宗教組織の單簡なる説明である。支那に於ては今尙農民が多數であるが祖先の禮拜は家族乃至親戚の祖先傳來のホールに於てなされた。此事は支那の宗教・法律及び道德の崇高なる命令であつた。支那人の住宅には特殊なる傳來のホールがあり其處には祖先の位牌が安置され日常之を尊崇する。之等の部屋の他に親戚同志の寺院もある。日本個々の宗教たる神道 *Shinto* も甚だ之に似た處がある。豪華なる寺院、豪莊なる儀式等は其後に現はれた。古代エジプトの宗教は今日の僻遠地方の埃及農民の夫れと殆んど同じ状態である。ブラックマン博士は彼の綿密なる研究において上部埃及の最近の農民の状態を述べ今日でも宗教組織は簡單であるとされる。即ち宗教的儀式は出生・死亡・業務・耕耘・播種といふ様な日常生活に關してと同様に一般の人によつて行はれた。かくの如く個人的な又は家族としての儀式の外に共同社會としての祭禮や儀式もあつた。農村にはムハメット教・コプト教の魔術師・僧侶等が居つたがその職能は前述の一般の人々の夫れを補充するものであつた。ブラックマン博士は農村社會生活の實態は古代埃及時代と殆んど變化して居ないことを指摘した。

古代ギリシヤ・ローマの初期に於ては祭式は寺院ではなく家に於て行はれ、各々の家には各々の神を持ち神は其家のみを守護した。此家内宗教 *Domestic religion* には定まつた規約もなければ一般的な儀式もなく各々の家は各々の儀式・祭禮・祈禱の様式を持つて居つた。そして神父・牧師は單にその様式を教へる權利を持つのみであつた。又各々の家には一つの祭壇があつて其周圍に家族が朝夕集つて祈りを捧げた。かゝる聖歌は家族によつて共同で歌はれた。都市化が高度に進み希臘・羅馬の人々が田園の生活様式を失つた時信仰及宗教組織の此形式は大變化を來たし新らしいものに變移せざるを得なかつた。併し此初期の宗教は希臘・羅馬の都市地方よりむしろ

農村地方に於てよりよく保存された。古代波斯・印度農村に於ける状態は今日の夫れと餘り大差はない。歴史上之等の國の初期の宗教組織と最近の農村地方の夫れは明かに農村宗教組織の特質を示して居る。

Fustel de Coulanges の正しく指摘せる如く婆羅門教は印度の聖書に影響を與へたにも拘らず Aryan 族初期の宗教組織の特性を維持した。主な神の一つは火の神 Agni (家の爐邊の火) であつた。彼の欲望を満たすか彼自身又は其家族の幸福を守護したならばヒンズー教徒は彼の祖先の靈に祈らねばならなかつた。印度に於ける最近の宗教書には多くの訓戒・教訓・祖先禮拜の記述・祈禱の様式等が述べられて居るが殊に父祖に對する祈りは最も重要視されて居る。或地方に於ては父祖を尊敬する事は神に對する夫れより重要であるとさへいはれて居る。此事は過去に於ける状態ではあるが今日も尚ほ印度の農村地方には多く殘存して居る。我々は之と同様な事を古代波斯に於ける農業宗教であるゾロアスタ教 Zoroastrianism にも見出す。即ち其處に於ては農作業は夫自身重要な儀式なりと考へられた。此事はゾロアスタ教に於ては如何に宗教と日常生活に於ける農作業が密接な關係にあるかを示して居る。文献によれば祖先崇拜と家族の祭祀は最も重要事として居る事が記されて居る。初期にあつては彼等は寺院を持たず山頂又は家庭内で祖先に對して祈禱をなした。此他農村宗教の同様な特質は露・伊・セルビア・ブルガリア及び開拓時代のアメリカ農村地方特にモルモン教徒にも多少見受けらる。今日でも人は歐洲の家に礫像や其他の宗教上の目的物を見ることが出来る。かゝるものは戸外や農村の十字路におかれた。家族・祖先の祭祀や家庭的神靈の殘存物は今尚ほ彼等の食事時にのべる名前の中に殘存して居る。

日常生活と宗教上の儀式は斯く密接な關係を有し殆んど重要な事柄は宗教的に行はれ、或るものは簡單に或るものは複雑に行はれた。教會は共同社會の集會所であり、宗教・教育其他娛樂の中心をなして居た。現在キリスト教が發展したとはいへ舊時代の宗教生活は未だ殘存して居る。

## 第二節 都市化の影響 Effects of Urbanization

都市化の傾向が著しく進むにつれ初期の農村宗教は其特質を徐々に失ひ、より複雑なる都市社會の影響によつて其下に發展せる他の要素のために排除されはじめた。其主要なる變化は次の如きものである。(一)日常生活から宗教上の儀禮が益々分化する事、(二)家族の住居から教會が益々分離し、(三)牧師の機能及び教主制度 Clerical hierarchy の發展に伴つて家族の宗教的機能が減退せる事、(四)新都市及び國民神 National deities によつて祖先崇拜及び家族の祭禮が置換された事、(五)儀式・祭禮・信仰に於ける家族の慣習による統制が少くなり宗教當局の夫れが多くなり複雑にして而かも形式的となれる事、(六)家族による宗教々育が衰退し牧師による夫れが増加せる事等が考へられる。

斯くて之等のすべては大變化を來たした。即ち宗教上農民は能動的な擔當者としての地位から宗教専門家としての牧師によつて導かれ統制される受動的な夫れに變化した。新しい宗教組織は若干のすばらしい神學・教理を發展せしめ之を美化し又儀式・祭禮を光輝あらしめ信者の祈願のため壯大なる寺院の建立をなした。又宗教上の優れた指導者としての地位に迄自身を高め、自身社會奉仕の立派な模範を示し國家的或は國際的スケールに迄も宗教組織を立て直ほした。併し農村共同態の教區内にある宗教組織は教主制の最高中央部に統制され指導される極く微小なる單位でしかなかつた。甚だ小なる部分が教區民の發言權として殘されたのみである。實際發言された時はしばしば抑制されたのである。何れしても日常生活と宗教、家族と牧師、家と寺院の關係は斯くして破られた。斯かる状態は都市に於て著しく又可成都市化せる國の農村にあつても多少認められる。都市化せる國の宗教組織は新しい特質と古い夫れの殘滓との混合であり、かゝる殘滓は都市より農村地方に於てよりよく保存されてゐる。多少の利益はあつたが此變化は若干の疑はしき結果を發生した。牧師による宗教的祭禮の獨占によつて人々の宗教の容忍の態度はしばしば宗教に對する無關心を生ぜしめた。牧師の專斷的地位は彼等をして神學

的思辯に耽らしめ農民に理解せられる處が少くなつた。宗教權威者によつて公式的に定められた單なる教理的反覆に從はせられ時には彼等權威者の宗教上の地位は生きんがために用ゐられた。又既に宗教局の公務的・官僚的機關によつて代置されたのであるが教區民の發言權に對して優越と偏狹の態度をしばくとつた。或場合は明かではないが徐々に明白になつて來た。

古代埃及・希臘・羅馬の諸都市に於ては過去に於ける歐米の夫れに於けると同様に多くの人々は殆んど全く其國の公認宗教 Official religion に對して敵意さへ持つて居た。同様の態度は之等の國の農村地方に於ける人々によつても又アメリカ農村にも或程度迄認め得る。此事實は農民に對して適切なる宗教組織を設定する事の困難なる事實を示す。

今日の宗教狀態の研究者は農村に於ける教會の多くの欠點を指摘した。其所謂欠點と稱せられる主要なものは何であるかに就ては研究者によつて夫々見解を異にして居るが併し物質萬能時代の精神といふ事に關しては大體一致して居る。例へば各員が適當に教會をサポートするには不十分な程、教會の數は多數であり而かも多くの教會は荒廢して充實せるものは殆んどなく、牧師は質に於て貧弱であり加ふるに教會への出席も至極不良である。農村人口の大部分は教會に加入せず、一方教會の設備も貧弱且不充分であつた。今日の物質萬能的精神に於て此欠點を匡正するには教會は銀行がなした如く統一整理する事、劇場の如き良い設備を供へる事、又會社の様な健全な財政を採用する事、他の商品が廣告する如く集約的に宗教も宣傳する事、面白い饗應例へばダンスさへもなす事、又よりよい牧師を雇ひ適當な給料を支給する事、出來るならば多くの祈禱及び日曜學校を設ける事等が必要であると考へられて居る。斯くの如く教會の數や富、形式的な教會信者の大いさ及び彼等の奉仕の量といふ如き純粹な外部的な規準によつて人々の生活に於ける宗教の價値を測定せんとする機械的な交渉 Mechanical approach では勿論不充分である。然し乍ら此方法によつても今日の農村に於けるキリスト教について尙不充分であるとい

ふ事は都市化の影響の明かな證據である。農村の宗教組織は宗教と日常生活の分離、宗教的機能の遂行にあつて人々の以前の能動的な關係が單なる受動的な役割に置換えられた事、家族の宗教機能の實際的消失、家庭と教會の分離等々からその苦痛を發して居る。若し研究者が此機械的交渉を廢棄し状態をより深く研究せんとするならば農村の最近の危機をして特に都市の宗教組織は多分もつと大きなものとなつて現はれるであらう。眞の危機は新しい都市の状態全部が公認的宗教におけるより皮相的な宗教的誠實を作つたといふ事實に存するのである。斯かる状態をいやすべく其根源を根絶することが必要である。夫れは教會の數を減じ、よりよき設備をするといふことでは不充分であらう。夫れは生活と宗教、家庭と教會、家族と僧侶を再び結合せねばならぬ。かくて農民は宗教的祭禮の遂行にあつて以前の如き能動的な役割を再び得るに至るであらう。一般の人から分離された牧師の説教・訓戒等の機能を還元することは望ましい事である。又此事は牧師の神聖を與へる力 *Blessing power* や特殊な神聖に對するみせかけ、*Precursatorial* の廢止を意味する。

夫れは教會を活動寫眞館・劇場・ダンスホール・政治集會所・控室又カフェー・レストランにさへ變へようとし又任職に共同態の各種の事件に參與せしめる力を持たせんと試むる人によつて考へられた事の様に見えるかも知れぬ。然しながらより精密な分析は次の様に示して居る。即ち之等の政策は上述の計畫を殆んど實現しない。之等の政策は宗教と日常生活を交渉づけ、生活に宗教的神聖味を與へる傾向はなく、宗教の最後のかくれ場である教會や寺院に夫れを導入し事物を神聖化するのみである。日常生活を神聖化する代りに夫等は宗教や宗教的態度に能率的な商人や商企業的手段に訴へて再び生活を與へんとするのである。夫等は宗教的方式や行動の神聖味を濫用して俗化するものであるが宗教によつて生活を神聖化するものではない。結局は恐らく夫れは危急の状態及び普通一般に稱せられる宗教的不調整 *Religious maladjustment* の極く僅かの改良に止るであらう。併し内部的の又深い見地における眞の宗教並に宗教組織の復興は唯非物質的な而かもより精神的な手段によつてのみ成し

とげられる。

## B 農村の邪教的信仰

複雑なる社會集團に於ける宗教的心性 *Religious mentality* は種々なる時代及び文化の信仰と態度 *Beliefs and attitudes* の集積である。此意味に於て最近代に於ける夫れは前時代の宗教的な盲目的文化 *Religions and magical culture* の殘滓と殘存物を含んで居る。従つて夫れの信仰が一つの純粹なる宗教形式に屬して居る社會集團を見出す事は困難である。併しながら此事は總ての社會階級の宗教的心性及び行爲が同様であるといふ事にはならぬ。一般に個人的にも社會的にも其信仰及び態度は其自然的・社會的環境に依存する部分が大である。従つて農民の環境が都市住民の夫れと甚だしく相異なる事から農民の宗教的心性乃至態度はあらゆる時代あらゆる國に於ける公認宗教の多様にかゝはらずその特殊性を闡明に表現する。農業者の宗教的心性、態度及び行爲の重要な特質に就て以下姑く論じよう。

### 第一節 崇敬神及び對稱 *Objects of Veneration*

神 *Deities* とか精靈 *Spirits* とかいふものは夫れが人格化されようがされまいが常に農業と最も密接な關係を有する現象——夫れは農民の福祉に對して又其感化は農民が斷えず強く感ずる處のものであるが——例へば土地及び其肥沃度・日光・風雨・大地の生産力・家畜・草木等の權化 *Incarnation* 象徴 *Symbolization* 表現 *Representation* 等を現はして居る。換言すれば農民の信仰は農業上の諸現象に關聯した觀念によつて色づけられ普及されて居り其農業的特質が純粹であればある程都市の感化に影響される事少く、反對に都市の影響特に機械文明の夫れが増大すると共に之等の特質は次第に弱められる傾向がある。此事は過去の歴史及び現在の事實が之を立證する。實際農民の盲目的な宗教を調査するならば夫れの萬神の中には必ずや農業上の神を見出すであらう。農業的性質が

明瞭でない處の多くの神は後になつて僧侶の考へによつて修正された處のものであつて實は農業神であつたのである。バビロン初期の神は天・地・水であり夫れは土地の肥沃の神であつた。埃及人が神として祭つた空は「地上に憩ふ無數の牛」を表はして居り、太陽は「每朝天の中の牝牛として或は天空の神の子として生れる」處のものであつた。埃及の大なる神 Great deities of Egypt は農業と埃及全經濟の福祉が夫れに依存して居るナイル河であつた。其他にも大地の神、肥沃の神、蔬菜の神といふ如き農業神もあつた。中部アジア・北アフリカ等にも異つた名稱で之と同じ農業上の神が多數存在して居た。北アフリカの傳來の神には鎌を持ち來たらすといはれる農業神 Saturnus があつた。此神はカルタゴやフェニキアのバール Paul に相當した。古代の其他の農業神はいベリヤ半島の Ataecina、ノール Gaul の Rosmerta, Mother of Fruits、ローマの Janus, Vesta, Dionysus, Terra Mater, Tellus, Ceres, Erecura, Bacchus 等がある。ギリシヤにも同様の神が異なる名稱で存在した。支那に於て主要なる神乃至人格化された對稱は多く農業に何等かの關係を有し殊に動植物・穀物・果實等は最も多く敬神の對稱とされた。初期の印度教(婆羅門教 Hindu)にあつては羊で車を牽き來たり家畜を保護するといはれる Pushan の如く一定の農業上の性格をもつた若干の神からなるものがあつた。天空の神・雨の神其他重要な自然現象の神はすべて農業の意味を持つて居た。例へば之は古代ペルシヤ人、ヒンズー教の荒廢せる牧場の主に似て居る。ゾロアスタ教の Ahura Mazda は家畜を豊富にしてくれる神とか牧場の神とかいふ如き農業の保護神である。最後に歐洲及び西部諸國の前キリスト教的偶像信仰は穀物の神といふ様な農業的性質の擔當者が多かつた。其長年月の存在にも拘らずキリスト教は此偶像信仰を完全に根絶する事は出来なかつた。此偶像教を單に修正せるものにはすぎない多くのキリスト教休日例へば St. George Day や St. Nicholas Day は偶像教の農業休日にかこつたものである。多くのキリスト教聖者 Christian saints は作物・家畜の保護者であり雨を恵む人であり、又乾燥を防ぐ人であつた。かくの如く農業者によつて尊崇される自然の對象物は非常に多かつた。又其處には宗教や邪教の

各種の組織の非農業的の神の記述に使はれる處の多くの農業的特性がある。

## 第二節 儀禮

如上農民の神が農業上の現象に關係あるが如く其儀式・祭禮・祈禱等も農業的性質 Agricultural character を有して居る。即ち夫等は農業上の利害乃至農作業に關するもので農業や農業的活動と關して行はれた。而かも夫等は有害物から農業の利益を保護し又其成功を確保せんとするものである。斯かる祭禮・儀式は各國、各時代の農民の中にしばしば見受けられる。農業上の作業と關係して行はれる宗教上の祈禱であるとか祭禮の如きもの、記事がある。

ヒンヅー教に於ては耕耘・播種・收穫の前後及びその期間中特別な儀式が行はれる。例へば其年の最初の收穫物を神に獻納するとか、圃場の雜草をとるか害虫を驅除するとか或は穀物を納屋に收納するとかの祭禮が行はれる。或は食前食後の祈禱、雨乞ひ、畑地を荒らす暴風雨を避ける祈りとかが行はれ、要するに農業に關する事は何でも宗教的な儀式を伴ひ而かも夫等は主要なる宗教的儀式であつた。之等は場合場合によつて特色づけられた。耕耘の前には特殊な方法で供物用の食物が料理せられ Indra, Manuś 其他特殊な神々に或る方式で獻納される。犁頭から作られる護符の用意は次の言葉によつてなされる。即ち「犁頭から作られる護符は私に甲冑を用意してくれる。」此特徴は支那の宗教的儀式・祈禱・供物に於てより明かにされる。即ち彼等にあつては如上の儀式は單に宗教的祭禮の主要なる部分をなすのみならず皇帝によつて行はれる政府の公務とさえなつて居る。之等の最も大きな祭禮の若干に就て記述すれば先づ第一に Hān-ki 即ち農業の父 The father of agriculture に對する畏敬、春の農業祭、豊年の感謝祭、年末の供物、土地と穀物の精靈である天地への供物及び農場の神等である。即ち印度に於ける如く總ての農業上の事柄は宗教的な祭禮とか獻身及び祈禱によつてなされる。支那人の宗教的儀式の本質的な内容をなす斯様な農業上の祭禮は「雨を興へ給へ」「日光を恵み給へ」「今年も豊年である様に」等

の祈りの形式に於て村民によつてなされる。希臘・羅馬に於ける農民の夫れも支那・印度の夫れと殆んど同様であつた。ヘヂオツド Hesiod の次の言葉は彼等の格言 *Motto* として役立つ。即ち「土地の神なる *Zeus* にして *Demeter* の神聖なる穀物が豊かならん様に祈れ」と。同様に彼は日常の重要な農業及び日常の作業を行ふに於ての種々な禮式について色々と助言して居る。さもなくば神の怒りにふれるから。之等の事柄は希臘・羅馬の農民によつてなされたのである。祭禮の主要なる部分は *Ceres*, *Demeter*, *Bacchus*, *Dionysus* 等の記念のためにといふ如き又は收穫・耕耘・供物等の如き農業上の特徴を持つて居る。ゾロアスタ教に於ては農業上の仕事の遂行は宗教上の祭禮と同一視されて居り又夫れと同等の意味をもつて居る。

如斯、農作業の運行が種々なる宗教上の祭禮と不可分離の關係にある如く宗教的儀式は多分に農業的性質を帯びて居る。ムハメツト教經典コーランはかくの如き儀式がアラビヤにも存せることを述べて居る。古代埃及の農民の祈りは農業的であつた。例へば祈禱は *Book of the Dead* 中の死者の言であるが夫れによれば「私は神のパンを減らさなかつたし又穀物を無駄にはしなかつた。私は神の牧場から家畜を盗まなかつたし又害しもしなかつた」と。「神々の父」であり「牧場によつて牛に生命を與へ給ふエヂプトの富」なるナイル河に對する讚歌や祈りもある。今日の農村の状態も同様である。都市から隔離された歐洲の僻地農民の様に埃及農民は夫れがムハメツト教徒にしるクリスト教徒にしても彼等の宗教は多く偶像的な農業的性質を帯びて居た。例へば彼等は穀物の刈入れ前に圃場に出でて最も良い穂を摘みとり之を護符として悪病除けのため戸口に吊るしたり豊年祈願のため室内にぶら下げたり或は時に來年の播種の際之を混ぜて播いたりする。

斯かる事例を此處に一々擧げて居ては際限がないから此位に止めよう。同様の現象が歐洲並に諸キリスト教國の農村地方の大部分に存在する。公認キリスト教の下に於ては今尙偶像信仰の宗教が行はれ多くのキリスト教派の儀式は偶像儀式を多少修正せるのみである。

扱てキリスト教の儀式・信仰は一般に農業者と非農業者によつて甚だしく異つて解釋される。即ち農業者にあつては夫れは農業上の特質や家族によつて色づけられるので教會・牧師乃至神學者等によつて與へられる事から甚だしく異つた意味をしばしば持つて居る。農民の神は牧師や實業家の夫れとは同一ではない。農民の信仰及び其祈りの對象は純粹に偶像であり而かも農業の環境に多く依存して居る。

此例としてはモルモン教の掠島の崇敬であるが之は穀物の蝗虫の害を防ぐに役立つ鳥であるためである。又流行病の如きものゝ流行を防ぐため多數の家畜が死んだ日のロシア農民の記念祭典の如き例もある。然かるに都市化、工業化特に機械文化の發展と共に斯かる特質は勿論次第にうすらぎつゝある。合衆國農民の祭禮・儀式に就てみれば此事がよく分かる。即ち彼等は既に近代的な都市的な傾向に漸次傾きつゝあるので此事は農民が都市の機械化された文明の中に生活しはじめた事を意味する。即ち彼等の農業も其生活環境も機械化された。彼等は屢々職業を變へる。又一般に彼等は都心をはなれる事遠くない都周に生活し活動する。夫故に彼等が従來の農民の信仰・宗教的行爲を廢棄するのは當然である。併し若干の従前の信仰や祭禮が都市住民の大多數より合衆國農民の中に今尙殘存して居ることは注意すべき點である。一般に之等は注目されて居ないが多く僻地農村に殘存して居る。今之等の盲昧な信仰の例を若干、合衆國民俗學の資料から引用して見よう。

小兒の上をまたげば其の子は生長せぬ

生後九ヶ月未滿の子が鏡をのぞけば不幸となる

馬鈴薯がよく根ざすためには月光の下に植えねばならぬ

甘藍は其の生育をよくするため三月十七日に植えねばならぬ

胡瓜は日出前に植えねば虫がつく

小麦はよく實入りせぬから満月前に刈つてはならぬ

穀物は満月のとき最もよく實る

月の角（カド）が上つたとき急いで馬鈴薯を植えよ  
月の角が下りたとき葱を植えよ

暗夜に苹果を收穫せよ

酒は暗夜につくれ

新月後最初の金曜日散髪せよ

月がかかる間は散髪するな

月がかかる時穀物を刈取れ

鳥が部屋に入つたり、馬が嘶いたり、鏡が破れたりするのは死の兆である

皿の中の水が沸騰すれば少女は嫁入り出来ぬ

二人の人が一人の頭を梳ればその中の一人は死ぬ

食後掃除すれば金満家にはなれぬ

麝香鼠が巢を作ればその冬はあたくかい

秋に畑が雑草で一杯になればその冬は困窮する

家鶏が夜十時過ぎて時を作れば翌日は嵐となる

豚の喧嘩は嵐の前兆である

家鶏が嵐の時かくれ場を求めればもう雨は長く降らぬ

之等はほんの極く僅かの例であるが各地方に共通な農村に於ける信仰の特質を現はして居る。といふのは之等は明かに農業的見地に立つて居り、現在の農民の間及び農業時代の傳統を今尙殘存する都市の教育を受けた者達の間にてさえ相當の範圍に分布して居るからである。

### 第三節 農業上の家徴主義及び幻想 Agricultural Symbolism and Imagery

農民の信仰・祭禮の第三の基本的特質は祈禱・祭禮・宗教的物語・道德的教訓其他に於て農業的觀念を多分に含む多くの幻想・形容的語句・象徴の存在する事である。農業者は彼に特に緊密なる關係を有する環境からの觀

念を現はす幻想や表現や比較や象徴をとる傾向がある。従つて此事から農業者の言葉が農業的環境から来る幻想と比較によつて特徴づけられる事は當然である。故に農業信仰や邪教的信仰の言語的表現の中に圃場・ブドウ園・鎌・穀物・刈取り・收穫・耕耘・播種・羊・牛・ミルク・蜂・果實・樹木といふ如き農業上の言葉の多くが含まれて居る事を見出したからといつて、特に驚くことはない。多くの農業宗教の教典にはかゝる形容語句・幻想・象徴或は比較語が多分に用ゐられて居る。T. Lynn Smith氏の著述の中には比較的新しい農業教たるモルモン教の若干の例があげられて居る。斯く農民が其農村の環境によつて特徴づけられるのはもつとも次第である。併し斯様な事は都市の宗教に於ては次第にうすらぎ都市近在から他の要素によつて置換えられる傾きがある。

#### 第四節 農村宗教の非物質的特性 Nonmaterialistic Character

農村信仰の第四の基本的特質は夫れが一般に精神主義的 Animistic and spiritualistic である事で都市化する農村信仰の場合を除いて稀に機械的・物質的 Mechanistic and materialistic である。併し此事は個々の農民に就ては物質的であり機械的なものがないといふ事にはならぬ。全體としてみれば夫れは除外例をなすもので農民信仰の一般的特質として考へての話である。之は都鄙住民間の一般的な環境的相違の反映にすぎぬ。我々が見る如く都市的環境は大部分が「人間の作爲」Man-made であるが農村的環境は殆んど「神の作爲」God-made である。尙其上、都市的環境特に最近の職業環境は機械的・無機的・物質的環境が優位を占め、機械の運轉は極めて機械的であり、其運動は全く精神的なことも幻想的な事も意思的なこともなく自然的でさへもない。都市住民特に工場労働者の大部分の職業的労働は單に機械若しくは物質的材料の變形でしかない。總て今日の都市は精神的なものによつてではなく機械的なものによつて圍繞されて居る。農業者の環境は都市の夫れとは全く異つて居る。自然は農場・農村を包み氣候・太陽・風雨・河湖・動植物の様な自然は農民に直接に而かも間斷なく感化を與へて居る。之等の現象は人力の外にある。農民の對象物は動植物であり用具は生命ある有機的なものですべて死滅せ

る機械的なものではない。斯かる差異は必然都鄙の宗教に對しても或程度の反映を與へずにはおかぬ。此差異は國により時代により各種の型態をとるであらうが、如何なる國如何なる時代にあつても此事は存在する事象である。都市に於ける機械主義・物質主義と農村の有機主義・精神主義との間の差異は多種多様の形ではられて居る。農民にとつて自然物は常に精神的でありむしろ意識的・有意的ですらある。精神的であり意識的な事物は單なる事物又は物體が科學的な原理のカテゴリーであると同様の意味に於て農民の論理的な概念的な生活のカテゴリーであるかに見える。

農民の宗教的觀念は夫れが如何なる形式をとらうが物質的な意識を欠如し夫等は過去に於ても現在に於ても都市及び甚だしく都市化せる所に存する。古代の印度・波斯・埃及・支那の如き國の農村社會の思想における夫等の重要な跡づけをなす事は困難なことである。Sieral Books of the East の如き著書は種々なる精神的なイデオロギー・唯我論・先驗的イデアリズム・精神主義・汎神論・多神論・一神論・物神崇拜論・動物崇拜論或はトーテムズムの如きものを述べて居るが物質主義・機械主義・不可思議論の如きは殆んど取扱つて居ない。併し希臘の都市化が進むにつれて物質主義的なデモクラテス哲學 Philosophies of Democritus や Leukippos 哲學、Lucretius、Anaxagoras の如き思想家の無神論、エピクルス哲學やソフィストの如き物質主義的な哲學があらはれた。Lucretius の物質的な概念やエピクルスの著書は共にローマの大なる都市化の時代迄は發展しなかつた。併し三世紀頃以後ローマの都市化が衰微する傾向にある時は之等のイデオロギーは終末を告げ十三世紀迄優勢であつた精神的信仰（キリスト教）の傳播となつた。其時代は歐洲の都市化が盛んに行はれた時代であるがルネッサンス時代及び夫以後盛んになつた此物質主義的・機械主義的イデオロギーの再現となつた。十七世紀には機械的であり著しく物質的な社會物理學の形式をとり十八世紀及び、夫以後は都市に發現し農村に擴がつた哲學と信仰の此型態と都市の生育は平行的に展開した。現在は科學的概念・物質主義・機械主義・無神論といふ如き種

々な形式・名稱の下に之等のイデオロギーは存在する。多くの科學者や都市プロレタリアートは斯くて靈魂・精神を否定し人間夫自身さえも拒否せんとする。彼等にとつて人間は機械より多少複雑な單なる複合事物に過ぎないと考へた。即ち農業時代に於ては總て物質的事物さえも精神化され人間化されたが都市化時代には靈魂人間及び心理的事象は總て物質化され機械化された。之は都鄙における信仰のコントラストであり關係である。前述せる此關係は結論を不條理にはしない。古代希臘・羅馬の都市住民を支配した物質主義・機械主義・無評論の波は農業者には無關係であつたし、支那・印度の場合も之等は農民の信仰對象とはならなかつた。現在に於ても同じコントラストが見られる。即ち都市の機械的・物質的思想の農民への汚染が甚だしいことにも拘らず精神的な信仰は農村地方に今尙盛んである。要するに都市は物質主義的觀念の温床である。

### 第五節 其他の農村と都市とに於ける宗教的相違點

都市農村の宗教間の他の若干の相違點の比較は農業信仰の他の特質を示す。

第一項 在來的及び渡來的宗教 Native and Foreign Religions 都市農村の分化が截然と始まつて以來、都

市人口の大部分は其社會在來の宗教より他の宗教に轉じ農村人口は在來の宗教を固執した。此事實を姑く見よう。合衆國への最初の歐洲人の移住者はクリスト教徒であり、此國在來の宗教はプロテスタンティズム Protestantism である。従つて今日合衆國農民の多くは之に歸依して居るが都市は渡來宗教であるローマンカトリック若しくはユダヤ教乃至希臘正統派 Jews, Greek Orthodox を信する者が多く、佛教・ムハメット教・チャイナ教其他非キリスト教を信奉する者は少い。此事は宗教統計によつて明かである。英國では在來の宗教は Established Church of England 及びプロテスタンティズムであり、ユダヤ教及びローマンカトリックは渡來のものである。而して此事から農民は前者を、都市住民は後者を多く信奉する。波蘭土の在來の宗教はローマンカトリックである。従つて如上の事實が明かであるならばポーランド農村地方は此ローマンカトリックが多く占めて居るといふ事が出來

よう。今各都市及其所屬地方全體に於けるローマンカトリックの占むる割合を比較するに、ワルソー市 *Warsaw* の住民の夫れはワルソー縣全體の八五・四%なるに對し六三・八%であり、ロツツ市 *Łódź* の夫れはロツツ縣の七七・〇%に對し五三・〇%、ウイルノー市 *Widno* はウイルノー縣の七九・四%に對し五九・〇%である。伯林市の人口千中プロテスタントは一九一〇年に八一五・五であつたに對しブランドンブルグ地方は九三七・三であつた。ローマンカトリックの數は前者は一一七、後者は五三、ユダヤ教は前者は四三・五、後者は三・一、其他の宗教は前者は二三・七、後者は六・二であつた。

スエーデンでは一九二〇年にローマンカトリックやユダヤ教の如き國教でないものに信服する人口の率は農村に〇・二、都市に〇・七、ストックホルム市に一・一であつた。一九二一年印度マドラス地方に於てヒンズー教は全體の八八・六%であつたが、マドラス市の夫れは僅かに八一・一%、ボンベール地方及びボンベール市の夫れは七六・六%及び七一・一%であつた。換言すれば此三地方及び其中心都市の外來教としてのキリスト教徒の率は次表の如くである。

8 三都市と其の地方におけるキリスト教徒

地 分 歴	ペンガル		マドラス		ボンベール	
	カトリック	プロテスタント	カトリック	プロテスタント	カトリック	プロテスタント
地 分 歴	0.81	3.22			1.37	
中心都市	3.30	8.30			5.90	

8 1925年ライオンランドにおける人口千に對する割合

	カトリック	プロテスタント	キリスト教	自由信教
都 市	1.1	0.2	2.8	18.5
農 村	0.0	0.0	0.0	6.1

此事は統計的に明かなるのみならず歴史的にも明かに確證される。過去に於ける新宗教の傳播の歴史は農村地方より都市によりよく普及し又農民より非農業者により早く弘布せられる事を教える。ギリシヤ・ローマ・イベリヤ・ゴール・ローマンアフリカ等の在來の宗教は農民の間によりよく保存されて居り都市の軍隊・智識階級・商人・役人等の住民は在來のものより渡來のものへ變轉した。Cumont, Toutain, Rostovzetf 其他の著述は此等の事柄を疑ふべからざるものとなし、各々の場合在來及び渡來の宗教の都鄙間の事實をのべて居る。此現象について他の若干の國の歴史も同様の事實を示して居る。此の理由は明かである。即ち都市には異なる宗教を信する種々なる國からの移民の多くが存在する。此事は都市における社會的接觸がより廣汎であり、より多角形的であるため種々の宗教に接觸する結果、渡來信仰の受容乃至傳播・普及を容易ならしめるものであるからである。此説明が此問題の適當なる解説である。

第二項 信仰の分布と變化 *Distribution of and Change in Beliefs* 如上の事實は又一方、信仰と祭禮の弘布及び變化に於ける都鄙の特質上の差異を生ぜしめる。此變化は一般に都市に於てより早く起り農村に於て之が受入れられるのは遅延する。尙其上此變化の程度は常に農村より都市に於て著しい。此事から都鄙間の宗教態度と信仰の間には齟齬を生ずる。此齟齬は宗教の隆盛期においては著しく、反對に相對的に發達が固定した時代に差程ではない。變化が先づ農村にをこり然かる後都市に擴がつて結果は前述の齟齬と何等異なる處はない。次に掲げる若干の事實は如上の事を説明するであらう。

ギリシヤ・ローマが都市化されるにつれ都鄙間の宗教及び信仰は徐々に差異をその間に生じた。即ち公認的な祭儀はローマ市によつて人々に課せられ農村地方に之が擴まつたのはそれよりすつと以後のことであつた。多くの古い質朴な農村的信仰と祭禮は農村に残存したが都市に於ては殆んど死滅し新らしい公認的な祭禮乃至渡來宗教が之に代置された。尙明かな説明はギリシヤ・ローマに東洋の祭禮が傳播し、都鄙に夫々在來の信仰が残存せ

る事實である。Cybele (神々の母) の東洋的祭禮 Ma-Bellou の神々 Isis, Osiris, Syria, Persia の祭禮、ユダヤ教主義・占星學・キリスト教義・無神論・物質主義・懷疑主義・合理主義等は都市の人々の心をたくみにとらえた。其處では知識階級・役人・商人・軍人・牧師・僧侶さへも在來のギリシヤ・ローマの宗教を捨てた。併し農民達は外來教のかゝる波にふれることなく昔のまゝに残存した。農民に觸れられなかつたものもあるがキリスト教の如きは都市に於て充分に受入れられ幾世紀もの後に至る迄うけ入れられなかつた。例へば *Mithra* の祭禮の如きはギリシヤ・ローマの市にのみ弘布せられ、その弘布の主なる擔當者は軍人・商人・移民・知識階級をして最後に役人であつた。もしあつたとしても農民はほんの極く僅かしか影響をうけなかつた。*Chaldean* の占星學的祭禮 *the Chaldean astrological cult.* も之と同様の経過をとつた。農民の間にあつてはかゝる外來教は宗教問題を公認せる國から入つて來る奴隸の間のみ反響を見出した。

東洋宗教の輸入についても同様である。農民にとつて彼等は表面的に残り又彼等の精神に深くは滲みこまなかつた。彼等はその傳統的な慣習に不屈の固執を持つて執着した。之は都市に生成し東洋文化に深く根ざしたキリスト教義についても同様である。ローマ農民は最も一心に之に反抗しつひに夫れに改宗した。彼等は最後に古代ローマ教における彼等の信念を放棄し都市の改宗後一、二世紀迄キリスト教義に改宗しなかつた。尙、羅馬によつて征服された諸國の在來の宗教は都市に於てより、より長く農村に保續された事も其一つの例證である。此點に就て *J. F. Toutain* は農民は在來の神・信仰・祭禮を墨守せんとするに對して都市の住民は渡來宗教殊に羅馬帝國の公認的祭禮を受容したと述べて居る。同様の現象は他の諸國、他の時代に於ても認め得る。例へば *Valentin* (都市名) におけるロシア人の改宗によればロシアに於て偶像教は都市に早く起つたが農村地方に於てはおそく弘布され長く支持された。農村はイタリーの文藝復興の間エピクルスのイデオロギー及び態度によつて正統派ローマンカトリックへの改宗が都市よりもおくれた。各國における都市農村のプロテスタンティズムの各種の型

態の傳播に於て又十八世紀のフランス哲學の無神論の傳播に於て。かくて多くの偶像寺院は教會に變つて行つた。多くの偶像神はクリスチャン・ネームを受け其機能は聖母マリア、セントジオーン、セントミカエル、セントマルティン、セントニコラスによつて、とつて代られた。多くの古い祭禮は新しいクリストの名前に於て繼續され少しも其性質、意味さへも變へられなかつた。同様のことがムハメット教佛教の傳播その他の宗教運動においてもみられた。

最後に、此事は現在に於ても認め得る。例へば政府が無神論的宣傳をなすソビエトロシアの場合が之を説明する。キリスト教に對する無神論及び共產主義的物質主義の代置は始めは都市に起り次第に農民に擴大し之が國內に行渡つたのは五、六年後の事である。尙一九三〇年のソビエトの報告によれば都市勞働者の5%及び農民の一八乃至八〇%がキリスト教徒であつた事も如上の事實を裏書する。一九二六、七年に二〇〇の米國新聞紙は合衆國主として都市に於ける宗教上の投票を行つた。其質問に對する回答 一二五、〇〇〇によればキリスト教義の主なるドグマは最も大きな都市において最も多く害を及ぼし六、〇〇〇の他の都市に於てより少く、小都市又は農村地方は夫れが最も少かつた。五、六の他の國々における統計も同様の現象を示して居る。此事實及び多くの同様の事實は疑ひもなく今日に於てキリスト教義の意味を滅せしむる主要なるファクターである。その結果としてすでに述べる如く同様な齟齬が生ずるに至るのである。

第三項 信仰の強弱 Strength of Beliefs 都鄙の信仰上の多少恒常的な又一般的差異は農村信仰に於て嚴格且堅固 rigidity and firmness なる事及び都市に於て懷疑的且詭辯的 skepticism and sophistication である事に見出し得る。農民の信仰は傳統によつて繼承されたものである爲、其處には疑問とか再考の餘地なきのみならず、各個人は全く同質的な宗教環境の中に生育し多くの反對的な或は批判的な觀念に接する機會がないため彼は彼の宗教觀を以て自然的な而かも正しいものとして無批判的に受入れる。年々日々彼は傳統的な祭禮觀念の中に生活

し之に對して少しも疑問を持つ機會に恵まれて居ない。其結果農民は信仰に對して堅固である。然るに若干の異なる宗教が混在する都市に於ては此事情は全く異つて居る。即ち都市には多くの異なる宗教が存在し種々なる宗教制度の間の鬭争や對立は絶えず市民の宗教觀を刺戟する。此對立は相互の批判となり、此批判は相對立する宗教の神聖さを弱め、場合によつては否定さへする。その結果として市民は若干の宗教觀によつてつながら、彼が他から自己の宗教の欠點を示されるとたちまち自己の信ずる宗教に對する確かな觀念を奪はれる。

斯くて市民は多くの神學的教理の詭辯を聞き自己反省の機會に恵まれる。斯かる環境は當然市民をして一つの在來の信仰に固執する事を困難ならしめ宗教的相對論乃至混合論 *Religious relativism and syncretism* が不可避的となり批判的・懷疑的・詭辯的・宗教的自山主義 *Freedom from any religion* なるもの、發展の契機を興へる。更に都市社會の移動的な事と異質的な事は如上宗教的混合論・批判主義・懷疑主義の發展に便宜を興へ、農村社會の同質的にして固定的な事は宗教に對して農民が確固にして質朴なる特性を附與する實質的バックをなして居る。上述の都鄙間の差異は勿論相對的なものである。此表現は多分その差異が都鄙の同質性並に移動性の状態における比較對照の度合によつて變化するから此相關々係は多少強く強調されすぎて居る。然し乍ら其重要な點に於ては其理論が現實に接近せることである。

第四項 宥恕・非宥恕の比較研究 或學者は、農村宗教は甚だ迷信的であり偏見のであり又農民は異教に對して頑迷であると主張する。併し之等の一般論は疑問的であるかも知れぬ。既に農民は新宗教を受容するに於て都市より幾分遅いといふ事を指摘したが、併し此事はより近代的な都市宗教が農村の夫れより、より科學的であり迷信的でないといふ事を意味するものではない。恐らく希臘・羅馬農村の傳統的信仰は純然たる科學的見地からすれば迷信的であつた。即ち夫等は科學的にテストされなかつた多くの信仰から成つて居り、假令若し科學的にテストされたならば全く科學的には無力なことが證明されたであらう。併しギリシャ・ローマの諸都市に受入

られた種々の機械的な物質主義的な神學やイデオロギーは夫程迷信的ではない。此差異は單に迷信と偏見の形式にあつたのである。即ち此時代の都市の宗教も純然たる科學的見地に於てはやはり農村に於ける如く非科學的・迷信的であつた。此事は希臘・羅馬に限つた事ではない。とは言へやはり都市と農村の信仰は或程度に於て異つて居る。一方甚だしく近代化せる都市宗教は非迷信的であり、より科學的であると考へられるが之も一概に斷じ得ぬ。例へば近代都市イデオロギーの多くのイズム例之、物質主義・無神論・機械主義・超環境主義・傳統主義 Flat behaviorism・心理分析・神智學 Theosophy, Christian Science・占星・社會主義・共產主義・反進歩主義等は今日の農村信仰や迷信と同様に非科學的である。之等都市イズム urban "isms" の偽科學的假裝は屢々人を欺く。夫等に眞の科學的テストが加へられるや否や夫等は單なる信念でしかなくなり事實に矛盾し彼等に支持されなくなる。ギディングスは近代都市及び其リーダーの中にはかゝる偽科學的迷信的イデオロギーの所有主が多いことを指摘して居る。かゝるイズム的迷信 "isms superstition" を除外して今日の都市はもつと日常生活に於て多くの迷信を持つて居る。A. M. Tozzer は大學に於ける研究者でも之等の迷信から全く超然たるを得ないと言つて居る。若しかゝる状態が大學の研究者に存するとしたならば都市の教育をうけた者及び一般市民の此點に關する事柄は如何であるかといふことを容易に想像し得るであらう。要するに都市が農村より非迷信的であると斷ずる明かな根據はなく、強ひて其間に差異があるとすれば夫れは迷信の形式に於てのみ存在する。

農村宗教がより異教に對して偏狹であるといふ事は又疑問である。歷史上曾て農村に於て他の宗教の宗教的迫害のあつた事を耳にしない。斯かる迫害の多くは都市化時代に都市の住民即ち制度化せる僧侶、政府又は知識階級によつて行はれる。之に反して農村は異教を容れるに寛容であり自己にアツピールした信仰は何であらうと之を信する丈け用意をして居る。であるから彼等はそれが神學者によつて是認されたものであらうがなからうが斯かる事に關する事なく若干の異教をとり入れて之を尊崇する事を躊躇しない。斯かる異教に對する寛容は各國の

歴史上にあらはれて居る。例へばヒンヅー教の歴史は他の農業國の夫れと同様に宗教上の寛容があらはれて居り宗教的迫害の如きものは殆んどなかつた。バラモン教は教理のない宗教として特徴づけられて居た。ヒンヅー教と佛教のモットーは「宗教的寛容」Tolerationであつた。即ち名譽は他の宗派に對して拂はるべきであり自派の優位を誇るべく他の宗派を輕んずべきでない。かゝる宗教的中性即ち寛容は印度の歴史にあらはれて居る。かくて異なる宗教を信する者は各所に生活して居り、殊に農村は之等が多かつた。かく農民の信仰は種々な神や全く異つた宗教制度の信仰等の混合であつた。今日エヂプト農民の信仰はムハメット教・キリスト教・農業偶像教乃至農業的迷信教の混淆であり而かも農民の心の中には之等の異教が平和に存して居り、異なる宗教を信する者同志は何等特に宗教上の争ひを起すことなく共に生活して居る。同様な事が他の諸國乃至他の時代にも認められるが併し此事は宗教上の争ひが農民の中に全くなかつたといふ事にはならない。之はむしろ斯かる宗教的偏狹が農民の間により少かつたといふ事を示すのみである。吾々が此處に批判せる意見は主として宗教上の争ひがより普通に行はれ宗教の自由が叫ばれる都市についてである。之等の人の宗教的異質性は宗教的偏狹から受ける苦痛よりもつと苦痛を彼等に與へるので彼等は宗教上の争ひから苦痛を除去すべく宗教的寛容の必要を要求せざるを得なかつた。かゝる要求は都市の信仰の自由と農村の偏狹の證據として學者に取扱はれて居る。然るに一般に都市よりも宗教的結合に於てより同質的な農民は其偏狹からの苦痛をうける事少く争ひもなく其故に信仰の自由を求めらる必要もなかつた。農民はかゝる證明を必要としなかつた。加ふるに都市の多くの宗教的な争ひは各種の都市集團の既得の利害 vested interest の對立に負ふて居り、此對立は僧侶・政府・資本家・其他の如き種々の黨派の間に宗教的な争ひとして現はれたものである。農民はかゝる既得の利害といふ如きものは殆んど持つて居なかつた。彼等は單にひたすら農作業を勵み傳統的な様式に於て其祭禮と儀式を行つた。斯かる環境の下に於て異教の偏狹に刺戟される事も少く概して農民は彼等の好むに應じて信仰せんとし又他に對しても夫れを許容した。斯くて

農民には、より偏狭である爲に起る宗教上の争ひ等は現在に於ても過去に於ても都市に於ける夫れの如く見る事は出来ない。

### 参考文献

#### 1. 英 書

- Angus, Samuel, *The Mystery-Religions and Christianity, a Study, in the Religious Background of Early Christianity* (London, 1924.)
- Dawson, William F., *Christmas: Its Origin and Associations* (London, 1902.)
- Feasey, Henry J., *Ancient English Holy Week Ceremonial* (London, 1902.)
- Fowler, William W., *The Roman Festivals of the Period of the Republic: An Introduction to the Study of the Religion of the Romans* (London, 1899.)
- Hartland, Edwin S., *The Legend of Perseus: A Study of Tradition in Story, Custom, and Belief* (New York, 1894-1893), 3 vols.
- Hull, Eleanor, *Folklore of the British Isles* (London, 1928.)
- Lang, Andrew, *Myth, Ritual, and Religion* (London, 1899), 2 vols.
- O' Hara, Edwin V., *The Church and the Country Community* (New York, 1927)
- Pearson, Karl, *The Chances of Death, and Other Studies in Evolution* (London, 1897), 2 vols.
- Peterson, Roy, M., *The Cults of Campania* (Papers and Monographs of the American Academy in Rome, Vol. 1, 1919.)
- Schaff, Philip, *History of the Christian Church* (New York, 1883—1893), 12 vols.
- Simpson, Willaim, *The Buddhist Praying Wheel: A Collection of Material Bearing upon the Symbolism of the Wheel and Circular Movements in Custom and Religions Ritual* (London, 1896)
- Smith, R., *Lectures on the Religion of the Semites* (1894.)
- Tille, Alexander, *Yule and Christmas, Their Place in the Germanic Year* (London, 1899.)

Zielinski, Thaddaeus S., The Religion of the Hellenistic Period (Russ., 1922)

二 獨 書

Golther, Wolfgang, Handbuch der germanischen Mythologie (Leipzig, 1895.)

Jahn, Ulrich, Die deutschen Opfergebräuche bei Ackerbau und Viehzucht (Breslau, 1884.)

Jong, Karel, H. de, Das antike Mysterienwesen in religiousgeschichtlicher, ethnologischer, und psychologischer Beleuchtung (Leiden, 1909.)

Meyer, Elard, H., Germanische Mythologie (Berlin 1891.)

Wissowa, Georg, Religion und Kultus der Römer (Munich, 1902.)

三 佛 書

Arbois de Jubainville, Henry, Le cycle mythologique irlandais et la mythologie celtique (Cours de littérature celtique, vol. 2, Paris, 1884.)

Béranger-Féraud, Laurent J., Superstitions et survivances étudiées au point de vue leur origine et de leurs transformations (Paris, 1896), 4vols.

Bertrand, Alexander L., La religion des Gaulois. Les Druides et la Druidisme (Nos origines, vol. 4, Paris 1897.)

Boulangier, André, Orphée; rapports de l'orphisme et du christianisme (Paris, 1925.)

Brillant, Maurice, Les mystères d' Eleusis (Paris, 1920.)

Clément, Félix, Histoire générale de la musique religieuse (Paris, 1860.)

Clément, Hémery, Histoire des fêtes civiles et religieuses du Département du Nord (1832.)

Cortet, Eugène, Essai sur les fêtes religieuses et les traditions populaires qui s'y rattachent (Paris, 1867.)

Foucart, Paul F., Les mystères d' Eleusis (Paris, 1914.)

Granet, Marcel, Fêtes et Chansons anciennes de la Chine (Paris, 1910.)

以上の著書以外に、尚ほノロキソ教授は其著述の末尾に Reading として極めて興味ある而かも有益な諸論文を掲載して居る。其中最も注目すべきものを此處に参考文献として再録する。

A. S. Altekar: Religious and Charitable Organization of the Ancient Hindu Village.

Willy Gierlichs: Religious Life in Contemporary German Villages.

J. G. Frazer: Rural Religious Beliefs and Rites.

William J. Thomas and F. Znaniechi: The Religious and Magical Attitudes of The Polish Peasants.

P. M. Meuriot: Influence of Rural-Urban Migration on Religion